

周作クラブ会報

(第86号)
2022年2月25日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

特報 未発表戯曲発見 オンライン新年会報告	1面
原稿発掘 連載・樹座の30年	2面
私が選ぶ遠藤周作の「作」 遠藤周作文学館便り	3面
周作クラブ長崎便り	4面
お知らせ欄	5面
	6面
	7面
	8面

特報 遠藤周作の未発表戯曲、発見

米オールバニイを舞台とした 『善人たち』など3篇が長崎で

没後25年が終ろうとする昨年暮、長崎市遠藤周作文学館で市長による定例会見があり、席上、あらたに3篇の未発表戯曲が収蔵品の中から発見されたことが明らかにされた。原稿はいずれも完成されており、それぞれが4000字詰め原稿用紙で1000枚を超える。遠藤戯曲の世界を広げる新発見は、新聞でも大きく報じられた。1月〜2月にかけての文芸各誌にそれぞれ掲載され、3月には単行本化される予定。 (記)加藤宗哉

一昨年、話題を呼んだ未発表小説『影に対して』の発見を機に、長崎市遠藤周作文学館では収蔵資料の再確認を行ってきたが、昨年11月、最終的に3篇の未発表作品が報告された。

資料確認に当たったのは、同文学館の学芸員と、文学館東京委員会の3名(宮辺尚、今井真理と筆者)で、結果として3篇を「公開すべき、完成した未発表作品」とした。すべて戯曲で、いずれも作者50代での執筆とみられる。

執筆年代順(筆者推定)に記すと、「切支丹大名・小西行長」評伝『鉄の首枷』戯曲版(4000字詰原稿用紙117枚)、「戯曲 わたしが棄てた・女」(同105枚)、「善人たち」(同124枚)となる。

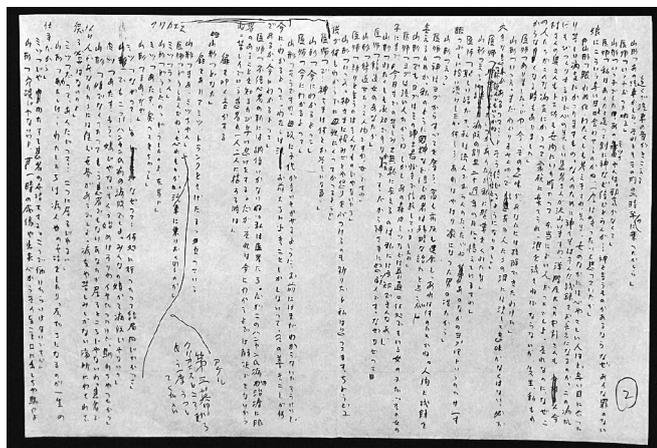
●「切支丹大名・小西行長」

——評伝『鉄の首枷』戯曲版』全4幕
小西行長を題材にした遠藤作品には評伝『鉄の首枷——小西行長伝』や、歴史

小説『宿敵』、短篇小説『ユリアとよぶ女』などがあるが、今回の戯曲は評伝『鉄の首枷』の刊行(1977)の後に執筆されたと考えられる。関白秀吉はもちろん、高山右近、加藤清正、細川ガラシャ、石田三成らが登場する舞台は華やかで緊迫感に充ち、行長の死に至るまでの内なる苦悩が浮きあがる。出色なのは、行長の侍女・あかねの存在だろう。架空の人物だが、行長の「面従腹背」と「信仰」をかたわらで見つめて、作品に奥行きをつくりだす。当時、畏敬する演出家・芥川比呂志が病気がちだったことから、復帰を願っての執筆だったとも考えられる。この作品は「波」(新潮社)2〜3月号に分載されている(2月号は1月28日、3月号は2月28日発売)。

●「戯曲 わたしが棄てた・女」

全3幕
みずからの代表的な中間小説『わたし
が棄てた・女』の戯曲化作品。原稿の



「戯曲 わたしが・棄てた・女」の草稿



上に「未完」というシールが貼られていることが、発見を遅らせた原因と考えられる。しかし戯曲を完成させながら、未発表のままになった理由は不明。もちろん、作品の最終ページには「幕」という

文字もある。

小説との大きな違いは、「ミツ」を捨てる「吉岡」が、戯曲では「50歳を過ぎた」となっていることだろう(小説では大学生から社会人の時期)。つまり30年が経過してから、吉岡はかつてミツが暮した病院を訪ね、スール(修道女)山形と往時を回想する。そのためミツとの出来事の意味合いがより鮮明にされている。小説では伏せられていた「イエス」の三文字も隠されることなく、「ミツちゃん」とイエスが何と似通っている」とも語られる。平凡な娘ミツが、舞台のなかでより鮮やかな聖化を見せるのが、今回の戯曲の特色と言える。本作は「小説新潮」2月号に掲載された(1月22日発行)。

●「善人たち」

全3幕
劇団民藝の演出家・渡辺浩子から依頼されたオリジナル戯曲。アメリカ人牧師(プロテスタントにおける聖職者)の家族を、作者はオールバニイというニューヨーク州の都市、かつて高等教育の象徴だった街に置き、そこに寄宿する日本人学生との愛と善意、そして人種問題、戦争への対処を描く。遠藤戯曲は登場人物の外貌や特徴には触れず、「ト書き」も少ないが、アメリカの牧師家庭という遠藤文学としては異色の設定が効果をあげる作品。「新潮」3月号に掲載された(2月7日発行)。

なお、上記3作品は、3月に新潮社から『善人たち』として単行本化される(3月28日発売予定)。

○
遠藤周作による戯曲はこれまで全部で7篇(『遠藤周作文学全集』——全15巻・新潮社——には6篇が収録)とされてきたが、今回発見の3作は、代表作と言われる『黄金の国』『薔薇の館』にも匹敵すると見られ、遠藤戯曲に対するあらたな評価が必要とされる。